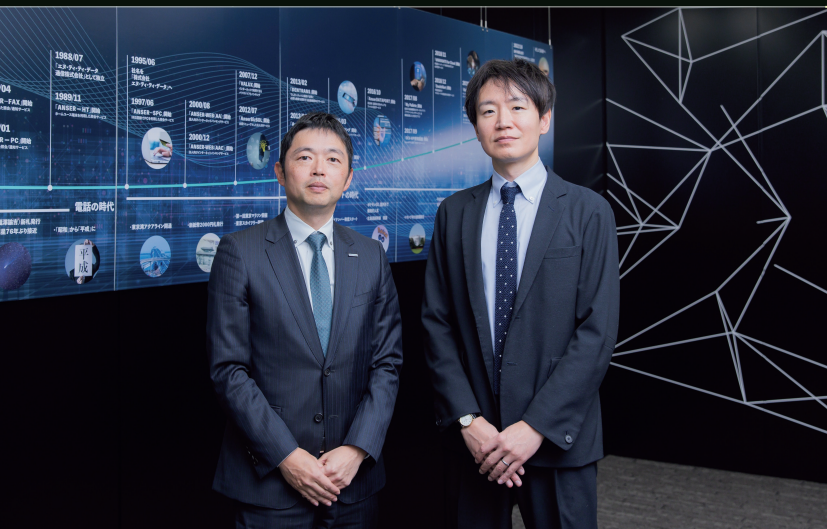


株式会社NTTデータ、 ANSERで実現する “戦略的API管理基盤”

—AIエージェント時代の ビジネス価値創出へ



日本最大手の
ITサービス企業が、銀行と
利用者を“つなぐ”仕組みの
中核にKongを採用

日本最大手のITサービス企業

株式会社NTTデータは、デジタル技術を活用したビジネス変革や社会課題の解決に向けて、お客さまとともに未来を見つめ、コンサルティングからシステムづくり、システムの運用に至るまで、世界70ヵ国以上でさまざまなITサービスを提供。技術革新、お客さまのニーズ、外部環境などの変化に対応しながら、会社創立以来36期連続での増収を遂げています。



業 界：情報・通信業

地 域 アジア・日本

使用事例：ミッションクリティカル（信頼性・性能）

導入時期：2026年

従業員数（グループ連結）：約 197,800人

所 在 地：東京都江東区豊洲3-3-3 豊洲センタービル

課題

銀行と利用者を“つなぐ”という コンセプトでビジネスを加速

株式会社NTTデータにおいて、金融機関のお客さま向けに決済や保険のプラットフォームなど、日本の重要な社会インフラを支えるITサービスを提供する第三金融事業本部。同事業本部の中で、銀行と利用者を“つなぐ”重要な仕組みを支え続けてきたeビジネス事業部では、オンラインでの金融取引や各種金融業務を自動化する共同利用型の決済ネットワークサービス「ANSER」を主力サービスとして提供しています。

1981年に開発された「ANSER」は、技術の変化に合わせて40年以上にわたり電話、FAX、PC、スマートフォン、APIへとチャネルを進化させ、全国500以上の金融機関、個人約1,500万人・企業約150万社に利用される金融インフラへと成長しました。

「時代の変化や技術革新をチャンスと捉えてサービスを進化させてきましたが、根底を貫くコンセプトは、銀行と利用者を“つなぐ”こと。これが我々の主たるビジネス領域であることに変わりはありません」とeビジネス事業部長の磯村 大誠氏は説明します。

課題

API管理基盤に求められる要件が 高度化

金融機関の機能を利用者に解放する動きが広がるなかで、“つなぐ”という観点で重要な役割を担うのがAPIです。たとえば、スマートフォンから銀行の機能を利用する場合や、FinTech（フィンテック）企業の提供するサービスが銀行側にある情報を利用する場合などです。

「銀行の機能を利用するために、我々はさまざまな“つなぐ”仕組みを提供してきましたが、今後は、その“つなぐ”手段としてAPIがよりス

タンダードになっていくと捉えています。APIの標準化により共通のインターフェースを提供することは、コストメリットを創出するとともに、銀行の機能を混乱なく速やかに利用でき、選択肢が増えることにもつながるなど、共同利用型のプラットフォームにおける価値提供の重要なファクターになっていくと考えています」（磯村氏）

今後ますますAPIの利用が増えていくにあたり、API管理基盤に求められる要件が高度化していくことは必至です。

「既存のAPI管理基盤はカスタマイズを重ねながら安定的に運用してきたのですが、ももとの製品が持っているコア部分の仕様がブラックボックス化しつつあり、柔軟性、拡張性に難を感じる場面も出てきました。一方で、いずれ性能面での限界を迎えるだろうとの懸念もありました。既存製品がサポートを終了するという知らせを受け、将来を見据え、今の仕組みから脱却して新しい仕組みを導入するタイミングだと判断しました」と磯村氏は語ります。



株式会社NTTデータ 第三金融事業本部
e-ビジネス事業部長 磯村 大誠氏

株式会社NTTデータ 第三金融事業本部 e-ビジネス事業部
デジタル戦略室長 山本 洋輔氏

ソリューション 中長期的な視点で拡張性と高い性能要件をクリアしたKongを採用

「ミッションクリティカルなサービスが担っている社会的責任を考えると、セキュリティと性能の2つは確実に

担保しなければならない領域です。性能要件としては、増えていく一方のトランザクションに耐えられること、五十日（ごとうび）などのトランザクションが集中する時に確実に応答できることが求められます。急激なトラフィック増加への耐性を強みとする選択肢も検討しましたが、問題発生時にも主導権を持って把握・制御できる「コントロール可能な環境」を選ぶ必要があると判断しました。その上で、柔軟性・拡張性の観点からも、自分たちで理解し作り上げられることが選定の大きなポイントになりました」（磯村氏）

同社は、これらの要件を満たしていたKongのAPIマネジメントプラットフォームに着目。まずは既存製品で構築してきた基盤を確実に移行できるかという観点を中心に、半年にわたりPoCを実施し、金融機関のお客さまに対して自信を持ってサービスを提供できる基盤かどうかを見極めました。特に、既存製品でかなり作り込みをしていたため、それをKongでも実装できるかどうか、その上で目指すべき性能を出せるのかどうかを重点的に評価したと言います。eビジネス事業部でデジタル戦略室長を務める山本 洋輔氏はその手応えをこう語ります。

「結果的に簡単に実装できたこと、十分な性能を発揮できたことで、実現性を確信できました。KongのAPIマネジメントプラットフォームは軽量の印象が非常に強かったですね。なぜここまで性能にこだわるのかというと、その理由は、自分たちですら想像できないAPI・データ活用や、AIエージェントが自律的にアクセスする未来を見据え、そのアクセスに耐えうる基盤を今から整える必要があると考えたからです。

これまではある程度予測可能な前提でAPIマネジメントを行ってきましたが、銀行のほか、FinTech企業や、クレジットカード会社、保険会社、さらには金融領域へ事業拡大を進める鉄道や流通などの事業会社へと、幅広いシーンでAPIの活用を提案していくとなると、利用されるタイミングや多重ピークなども、どんどん予測不可能な世界になっていくと思うのです。そうなったときに、性能面で耐えられるのはもちろん、我々自身の予測レベルをもっと高めておく必要があるわけです。これからは、こうした要求に長期的に応えられる製品であることが重要なポイントになってきます」

また、PoCにおけるKongのプロフェッショナルサービスの印象について、磯村氏は、「旧基盤から円滑に移行し、信頼性の高い基盤を実現するためにも、プロジェクトにしっかり伴走してくれるサポート体制は安心感がありました。常にコミュニケーションしながらPoCを進められましたし、技術的な難所に直面した場面でも、最終的に理想とする構成を実現できるまで共に改善に取り組んでくれました。これから先にどのような課題が生じたとしても、Kongなら一緒に解決していけるだろうという期待が高まりました」と評価します。

成果 開発作業を通じてAPIを資産として育てていく意識が向上

PoCを終え、現在は本稼働に向けて構築中だという同社。性能面では、重要指標であるTPS（Transaction Per Second）が既存製品比で約2倍に向上する期待感を持っています。Kongの導入は、社内関係者からも将来を見据えた選択として高く評価されており、共通基盤としての再利用性から他部門・他プロジェクトへの拡がりも見込まれています。



山本氏は、プロジェクトに意図的に若手社員をアサインしたことに触れ、「APIの今後のトレンドを作っていくのは、若手社員にとってもモチベーションになりますし、Kongが若い技術者を早いタイミングでより多く育てていくためのかっこうの教材にもなっています」と副次的とも言える効果に言及。Kongがオープンソースをベースとしている製品であることも手伝って、以前のように製品をカスタマイズする感覚ではなく、中身を理解し共有しながら作り上げていく工程を通して、組織内にAPIを資産として育てていく意識が高まりつつあります。

成果 AIエージェント時代のAPI活用は標準化とセキュリティが鍵

今後Kongを中核としたAPI管理基盤を、単なる技術基盤としてではなく、お客さまのビジネス価値の最大化や、可視化、改善につなげる戦略的な基盤へと進化させていくにあたり、AIの存在はもはや無視できないものになっています。

「人間の指示によってある程度決まったタイミングで銀行の機能が利用される現在と違って、AIもしくはAIエージェントのようなものにAPIが呼ばれる回数も増えていくことは間違いありません。AIと共に社会全体を豊かにしていくことを考えると、似たような機能が乱立する状態は望ましくなく、標準化によってAIにとって使いやすく、選んでもらえるAPIを整備していく必要があります。

また一方で、AI時代においてAPIゲートウェイは単なる「接続口」ではなく、AIから金融システムを守る能動的な「門番」としての役割が一段と重要になります。単なるID連携にとどまらず、「このAIエージェントが今の瞬間に接続してよい相手か」を文脈（コンテキスト）に基づいて判断する認証・認可が求められるでしょう。我々はどうしても守ることに重きを置いてしまいがちですが、グローバルスタンダードであるKongを採用することで、世界中のユースケースやノウハウを取り込み、日本国内のAPI標準化を加速させたいと考えています」と磯村氏。

山本氏も、これからは標準化とセキュリティがブレイクスルーポイントになると指摘。「標準化されたAPIを利用する側、利用される側の属性、利用用途によって、担保されるセキュリティも異なってくるはず。APIの数が増えるにつれ認証方法のバリエーションも増えていき、おそらくロジックだけでは作り込めない世界になっていくことも考えられます。だからこそ、KongのAI技術を活用してデータ分析を行い、細やかにチューニングしていきたいですね」と語ります。

守りと攻めのバランスをどう取っていくのか。同社はKongの知恵とノウハウを借りながら、AI時代における新しいAPIのあり方を模索し、金融機関から非金融領域の企業まで、幅広いお客さまに新しいビジネス価値を提供していく考えです。

